

「資本主義」論の形成と展開

—アウグスト・M・クノル

教授の「資本主義」論—

住 谷 一 彦

ま え が き

一 「資本主義」概念の類型論

二 フランス革命の波紋——ドイツ——

三 フランス革命の波紋——フランスとイギリス——

四 マックス・ヴェーバーの「資本主義精神」論

五 むすび——若干の問題点——

ま え が き

ウィーン大学のクノル教授 Augst M. Knoll⁽¹⁾ は、その好著 Das Kapitalismus Problem in der modernen Soziologie, 1953. Wien の冒頭において、ほぼつきのような意味のことを述べている。すなわち、早期社会主義者の一人であるルイ・ブラン Louis Blanc がその著 Organisation du travail, 1839. のなかで、「資本主義とはある一人が他人をおしのけて資本をわがものとすることである」といつてのち、またマルクス K. Marx とエンゲルス F. Engels が「共産党宣

「資本主義」論の形成と展開

言」(1847) のなかですこぶる固切れのよい表現で一般大衆にむかって資本主義批判をおこなって以来というものは、⁽³⁾「資本主義」概念は、ややもするとある社会現象のプロパガンダ的な意味に理解されてしまうようになった。⁽⁴⁾マルクスのきわめて学問的な労作である「資本論」(二八六七) が刊行されたのにもかかわらず、「資本主義」論はアカデミックな場では絶えて久しく学問的な検討を経ないままでおわった。⁽⁵⁾こういった事態は、たとえば一八九六年にでた Handbuch der politischen Ökonomie の第四版に「資本主義」という見出し項目がないことにも、さらにはそういう言葉にすらふれていないことのうちにも、⁽⁶⁾また一九二三年の Handwörterbuch der Staatswissenschaft の第四版にやっと「資本主義」に関する解説がなされたが、なおそれが「資本主義一般に関する論究が学問的著述のうちに入るかどうか疑いなきを得ない」と書かれざるをえなかったことのなかにも充分に看取することができるであらう。ソムバート W. Sombart は一九〇二年に Der moderne Kapitalismus⁽⁸⁾ においてまた一九〇四年 Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik のなかで、彼の目下の研究対象が「資本主義」研究にあることを明らかにした。そして、一九一四年の Grundriß der Sozialökonomik では学問の上でも、この概念がいまやあらゆる意味において少しもゆるがせにできない普遍的な意義を獲得したことが、何人の眼にも明瞭となったのである。⁽⁹⁾と同時に、それはまた新たな

「資本主義」論の形成と展開

一九四

問題の局面をもふくむようになった。すなわち、一方ではジョー・フッキング H. Sieveking の Feudal- und Zunft-kapitalismus (10) とか、ヘーブナト A. Dopsch の Der naturalwirtschaftliche Kapitalismus in der Karolingerzeit (11) とした歴史家における「資本主義」の用語法の問題、他方では Trust- und Kartell, Export- und Effekt-Kapitalismus, Lohnarbeiter- und Gewerkschaftskapitalismus などの Genossenschafts- und Kollektiv-Kapitalismus といふ新しい用語法の出現である。すでに今から二〇年以上前にブラウエル T. Brauer が四〇ほど (12) またゾムバルトが一八七もの「社会主義」概念を指摘したとき (13) われわれはすでにディアンクティンシュエな意味からも最少限それと同数の「資本主義」概念が存在したであらうということが想像できるのである。

クノル教授は当面の問題状況をこのように整理して「資本主義」論の独自の思想的検討を試みようとする。本稿はオーストリアのカトリック社会思想家として知られている彼の所説をややたち入って紹介しつつ、その問題の所在をなにごとか明らかにしようとする覚え書風の試みである。

(1) クノル教授は現在ウィーン大学法学部の社会学正教授である。彼はオットマール・シェパンの跡をついだのであるが、その学説はシェパンの社会有機体説とは異なっている。シェパンの社会有機体説を深くうけてゐる。この点は彼の代表作 Der Zins in der Scholastik, Wien, 1938. をみれば明らかである。

る。一九五九年筆者のウィーン大学留学中に聞いた彼の講義は、徹底したシェパン批判に終始しており、啓蒙思想の自然法理念と歴史主義の問題に彼の主要な関心がそそがれていた。本稿はもとより彼の思想の全面的な紹介をくわだてたものではないのである。それについては別の機会に譲りたいと思う。

(2) Louis Blanc, Organisation du travail, Paris 1850, p. 161.

(3) ただし、マルクスは「Kapitalismus」という言葉は使用してゐない。それに代る用語は「彼の場合『Kapitalische Produktionsweise』であつた。このマルクスの基礎概念の系譜学的研究は、ヴァンクナー Arnold Winkler が『Die Entstehung des kommunistischen Manifestes, Wien 1934.』のなかで試みている。もちろんマルクスとはちがつた意味ではあるが、Julius von Soden がその著 National-Ökonomie, Leipzig 1805, I, S. 148 p. Kapitalistischer Produktion という言葉を用いてゐる。『Kapitalist』概念はウィルヘルム・ホフマン Wilhelm Hohoff が Unternehmungen und Mehrwert, in Archiv f. die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, Leipzig 1914, V, S. 476f. で興味深い論旨を展開している。その他いろいろの著書などを参照。Richard Passow, Kapitalismus, eine begrifflich terminologische Studie, Jena 1924, II, SS. 277-284. Otto von Zinnednek-Studenhorst, Kapital und Kapitalismus, Zur Terminologie und Begriffsbestimmung in der neueren Literatur, in Schmollers Jahrbuch f. Gesetzgebung, Verwaltung u.

Volkswirtschaft. München 1930. LIV/2. S. 1059-1092. Os-
kar Zoglits, Einheit oder Dualismus des Kapitalbegriffes,
ebd. 1936 LX /1. S. 159-194. Alfred Hüller-Armack, Ge-
nealogie der Wirtschaftstile, Stuttgart 1941. S. 72ff.

(4) Franz Keller, Art. "Kapitalismus", Staatslexikon,
hrsg. von Hermann Sacher, Freiburg i. B., 1927. II. Sp.
1805f. Richard Passow, Kapitalismus, ebd. S. 2f. 75.

(5) Richard Passow, Kapitalismus, ebd. S. 8f. そのやうな
「資本主義」という概念について敢えて何うとも知らうと欲し
なかつた人々として、バクホル教授はシェネロー Gustav von Sch-
moller, ローレンツ Ernst Rothschild, ホーレンベルグ R.
Ehrenberg などをあげよう。

(6) Handbuch der politischen Ökonomie, hrsg. von Gustav
von Schönberg, Tübingen 1896. (Volkswirtschaftslehre) I.
S. 881f. II/2. 1898. S. 590.

(7) Handwörterbuch der Staatswissenschaften, hrsg. von
Ludwig Elster, Adolf Weber, Friedrich von Wieser, Jena
1923. Art. "Kapitalismus" von L. Pohle, V. S. 584. 一九一
〇年の第三版ではホーム・バヴ・マルクが「資本」の項の最後に
「資本主義」という言葉をつかっている(V. S. 783f.)。なお、そ
の他の辞典では Staatslexikon の第一版(一八九四)に Karl
Scheimpflug が "Kapital und Kapitalismus" (III, Sp. 588-
609) をかゝる Handwörterbuch, Die Religion in Geschichte
und Gegenwart, Tübingen 1912. III, Sp. 917. J. Gottfried
Traub が「資本主義」という項目を執筆している。

「資本主義」論の形成と展開

(8) Werner Sombart, Der moderne Kapitalismus, Leipzig

1902. それに対する批評を「シェネロー」の Jahrbuch f. Ges-
tehung, Verwaltung und Volkswirtschaft in Deutschen
Reich, Leipzig 1903. XXIII, S. 297. に書いてゐる。彼はそ

でヴェンバルトの「資本主義」概念がマルクスからの借用であり、
ジャーナリスティックな論争のテーマとしては日常世間の論議の
まどになるかも知れないが、しかし学問的にそれがどれくらい重
要な意義を有しているかは疑問である旨を述べている。だが、
「資本主義」という用語がゾムバルトのこの書物とともに広く一
般に普及するにいたつた事実には、留意されるべきことであらう。

(9) Grundriss der Sozialökonomik の主要な編纂者はいうまで
もなくマックス・ウェーバーである。ウェーバーを研究する上に
この編纂を軽視しては、彼の思想構造を充分明らかにしえないの
ではなからうか、と私は思っている。「経済と社会」がこの第三
巻として書かれてゐることは、もはや周知のところであるが、そ
れだけを取りださずにこの「社会経済学綱要」全体の理論構想の
なかに位置づけ、あわせてこの「綱要」Grundriss の全貌を明ら
かにすることこそ緊要であるといわなければならない。その意味
で、内田義彦氏がその著「経済学の生誕」(未来社)のなかで、
「この点からすれば、ウェーバーの評価は、ひとり社会学者とし
てのウェーバーのみをとりあげず、彼の包摂する社会経済学の全
体系がどういふものであつたかをみながらおこなわれる必要があ
る。——かの膨大な Grundriss der Sozialökonomik がかれの
編集にかかるものであることをかんがえよ」(同書、九九頁)と述
べておられることは、まことに鋭い指摘であるといえよう。

「資本主義」論の形成と展開

一九六

- (10) Heinrich Sieveking, Die kapitalistische Entwicklung in den italienischen Städten des Mittelalters, Stuttgart 1909, S. 69f. 彼はそのなかで「中世は近代よりもむしろに資本主義的であつたやうだ」と意見を述べてゐる。Vgl., ebd. S. 98.
- (11) Alphons Dopsch, Die Wirtschaftsentwicklung in der Karolingerzeit, Vornehmlich in Deutschland, Weimar 1922, S. 54, 286f., 369.
- (12) Gotz Briefe, Zur Kritik der klassischen Gewerkschaftstheorie, in Soziale Praxis u. Archiv f. Volkswohlfahrt, Berlin 22. Dez. 1920, XXIX/64, Sp. 1531. 彼はそのなかで「恣意的な革命的實上は斗争と鉅堀の無意味な追求によつて人間性の崩壊を伴つて社会革命を経る Gewerkschaftskapitalismus が成立するたふと」と述べてゐる。メンデルトは「また労働者の牢固として抜き難い資本主義的な經濟心情によつて語つてゐる。Vgl. Der moderne Kapitalismus, München und Leipzig 1928, II/2, S. 811. モーントンの Robert Liefmann は Grundätze der Volkswirtschaftslehre, Stuttgart und Berlin 1928, I, S. 593. によつて「Effekten-Kapitalismus」という用語をこつてゐる。"Genossenschaftlicher Kapitalismus" とつては、メンン Albert von Schöffle, Kapitalismus und Sozialismus, Tübingen 1870, S. 722, 731. "Kollektivistischen (sozialistischen) Kapitalismus" とつては Oswald von Nell-Breuning S. J., Kirche und Kapitalismus, M-Gladbach 1929, S. 2.
- (13) Theodor Brauer, Der moderne deutsche Sozialismus, Freiburg i. B. 1929, S. VI.
- (14) Werner Sombart, Deutscher Sozialismus, Berlin 1934, S. 65ff.
- (15) 以下若干の解説を加えたいと考えている、クノル教授の著書(本文冒頭にかかげた)は、彼のユニークな立場からする「資本主義」論の形成と展開に関するきわめて含蓄のある研究であり、その背後にひそむ彼の問題意識が深く現代ヨーロッパ文化の危機状況につながつてゐることは、ほぼ察しうるところである。なお、本稿では本文で主に教授の論旨を紹介しつゝ、(註)で文献および筆者の註釈を加えるかたちをとることにした。ただし、単なる紹介でないため、叙述の順序や説明の仕方は、筆者の関心にもついておこなつたことを申しそえておきたい。

一 「資本主義」概念の類型論

「資本主義」論は、さしあたつてまず最初の足場を「資本」概念をめぐる問題史のなかに有しているといえよう。もちろん「資本」概念の形成史に関しては、ベーム・バウエルクの指摘したやうな問題もみられた。しかし、クノル教授は社会思想史的な観点からはただ二人の經濟學者、すなわちアダム・スミスとカール・マルクスが決定的に重要であるという。彼のみるところでは、こうである。スミスにおいては「資本」概念は國民經濟的給付の担い手としての「生産資本」と、私經濟的営利の担い手としての「営利資本」に分つことができる。ところが、マルクスでは「資本」はその背後に社会倫理的範疇を予想させる一種の規範的性格を帯びさせられて把えられている。すな

わち、そこでは「剰余価値を生む価値としての資本は、ひとつの物ではなくて、物に媒介された社会関係であり、人と人との間の搾取関係なのである。」

ここにあげられた三つの「資本」概念のなかには「資本家」とは何であるかに関する三つの典型的な表象が存在している。すなわち、スミスは「国富論」で、あるときには営利資本家、すなわち「種子をまくことなく收穫することを好む」人々を、またあるときには「人類の善行者」である生産資本家を、ともに「資本家」に一括している。マルクスはそれに対して「資本家」を「プロレタリアートの搾取者」として簡明に規定した。こうして「資本主義」の概念もこの三つの「資本」概念に対応して形成されることになる。〔一〕「資本主義」を生産技術の面からテクノロジカルに概念構成する。「資本主義」のもので押しすすめられる生産諸力の発達は中世的な牧歌的な景観を急速に工業的なそれへと変貌させていく。この生産体制においては、社会的な人と人との交渉関係、der Verkehr は、個人の私法上の権利義務の関係を前提しつつ、生産手段の所有者と非所有者とに分たれていき、賃銀契約の関係となる。この「資本主義」概念は、経済のテクノロジカルな側面を重視して概念構成されているので、「資本主義」を理論的にも実際のにも道德には無関心な経済組織として扱う自然法的社会学者、とくにスコラ学につながる学者たちのあいだに、今日もなお見いだされるところのものである。たとえば、各司教管区に対してカトリック教会の

「資本主義」論の形成と展開

対処すべき全社会問題の取扱いかたに関して指示を与えた教皇廻勅⁽³⁾は、Rerum novarum, 1891. にしても、Quadragesimo anno 1931. にしても「資本主義」問題を、この中立的なヴェルトフライの「資本主義」概念でもって処理してしまっている。つぎは、〔二〕工業的生産技術と社会的交渉関係における個人の処分権を前提とする古典経済学の「経済人」の精神である、かの可能なかぎりの利潤追求の精神が全社会を貫徹しているような社会体制としての「資本主義」である。したがって、この意味における「資本主義」および「資本主義の精神」は、中世的な需要充足経済ならびにその経済心情とは正反対である。この「資本主義」概念は、自然法的社会学者、とくに徹底した個人主義的自由主義者のなかに用いられている。昔でいえば、フーガソン Ferguson⁽⁴⁾ やスミス⁽⁵⁾、今日では西欧市民階級の新自由主義者であるミース Mises⁽⁶⁾、ハイエク Hayek⁽⁷⁾、レプケ Röpké⁽⁸⁾、リップマン Lippmann⁽⁹⁾、オイケン Eucken⁽¹⁰⁾、らのオルドー派などに典型的にみられるように、そこでは「市民社会（「資本主義」）概念は、国家に対立するものとして、自由な諸個人から構成される交易社会として構想され、したがってまた、自由経済と開放的な性格とが要請されることになる。最後に、〔三〕「資本主義」を一個の歴史Ⅱ社会的な体制として把える「資本」概念からは、「資本主義」は「共產主義」に至る人類社会発展の辯證法的段階をなすことになる。すなわち、それは一つの生産様式、それも「資本主義」的な、換言すれ

「資本主義」論の形成と展開

一九八

ば、マルクス剰余価値論にもとづく独自の意味における「資本家」による「労働者」搾取の機構なのである。したがって、この場合には結局において特定の価値判断の概念がここに入り込むことになる、とクノル教授は見ている。一八七〇年以降新しく出版された社会主義的文獻や、またブルジョア的な、あるいは保守的な、「資本主義」に関する文獻および社会政策的文獻については、後段においてあらためてとりあげることにしたい。

(1) クノル教授は、ここでマルクス「資本論」、さらに「共産党宣言」にまで遡及して、「搾取」という規定がモラーリッシな意味でも「資本制的生産様式」の構成契機としてつらぬかれていくことを指摘し、それについてヘルンシタインの論文が今日なお顧みられるべきものを含んでいると述べている。Edward Bernstein, Zur Theorie und Geschichte des Sozialismus, Gesammete Abhandlungen, Berlin 1904, II, S. 139. derselbe, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgabe der Sozialdemokratie, Stuttgart 1921, S. 244. マルクスの「搾取」概念を倫理的に理解しようとする立場は、我國では一連の論争史をももつ今日ではすでに批判すみの見解とされているのであるが、ヨーロッパではその点からずしも日本と同じではない。たとえば西欧の精神的風土に育かれた俊英のマルクス学者ミータが、「労働価値論がそれじつら、なんらの特定の倫理的または政治的な見解をふくんでいないことは事実であるが、しかし、マルクスのばあい（そしてある程度までブレンシンのばあいにも）それ

がきわめてはつきりした倫理的・政治的見解と手をつた、すえて、いるということも真実である」（傍点原文。水田・宮本訳「労働価値論史研究」、日本評論新社、一五七頁）と述べていることは、きわめて興味深い。なお、価値判断が入りこむことを「非科学的」とみるか否かについては、マックス・ヴェーバーの有名な問題提起にもとづく一連の「価値判断論争」があり、今日でも容易には決着しがたい社会科学方法論上の問題の一つになっている。ただ、クノル教授がこのような発言をした背後に、マックス・アトラを中心とするオーストロ・マルクス主義の、この点に関する豊富なマルクス研究の成果を予想することは、充分に可能なのである。なお、マルクス主義におけるモラーリッシな実存主義的側面を鋭く分析したユニークな文獻として、つぎのものをあげよう。Leo Gabriel, Freiheit und Existenz, Dialektischer Materialismus und Existentialismus, in: Weltbild, Vierteljahrsschrift für alle Gebiete der Forschung, Wien April 19, 1/2, S. 116ff.

(2) コップ「自然法的社会学者」というとき、それはもしあたつゾムバートの用語法としたがつづる。W. Sombart, Die drei National-ökonomie, München u. Leipzig 1930, SS. 21-84. Vgl. Derselbe, Soziologie? Was sie ist und was sie sein sollte, Sonderausgabe aus den Sitzungsberichten der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin 1936, S. 4f. (c) Gustav Gundlach, Die sozialen Rundschreiben Leos XIII. und Pius' XI. Text und deutsche Übersetzung, Peder-

- born 1931, S. 3, 19f. Vgl., A. Knoll, Der soziale Gedanke im modernen Katholizismus, Wien 1932, SS. 229-237.
- (4) Gustav Gundlach, ebd., S. 95, 97, 105, 125, 129. Vgl., Oswald von Nell-Breuning, Die soziale Enzyklika, Erläuterungen zum Weltundschreiben, (Quadragesimo-anno) Papst Pius' XI., Köln 1932, S. 181ff.
- (5) Adam Ferguson, An essay on the history of civil society, Edinburgh 1767, London 1768. Vgl., Herman Huth, Soziale und individualistische Auffassung im 18. Jahrhundert, vornehmlich bei Adam Smith und Adam Ferguson, Beitrag zur Geschichte der Soziologie, Leipzig 1907.
- (6) Ludwig von Mises, Die Gemeinwirtschaft, Untersuchungen über den Sozialismus, Jena 1922. Derselbe, Human Action, A. Treatise on Economics, London 1949.
- (7) F. A. Hayek, The Road to Serfdom, London-Cambridge 1943.
- (8) Wilhelm Röpke, Civitas humana, Erlenbach-Zürich 1945, Die Gesellschaftskrisis der Gegenwart, Erlenbach-Zürich 1942, Internationale Ordnung, Erlenbach-Zürich 1945, Die Lehre von der Wirtschaft, Erlenbach-Zürich 1949, Ist die deutsche Wirtschaftspolitik richtig? Analyse und Kritik, Stuttgart und Köln 1950.
- (9) Walter Lipmann, the Good Society, Washington 1943.
- (10) Walter Eucken, Die Grundlagen der Nationalökonomie, Godesberg 1947.

「資本主義」論の形成と展開

- (11) Ordo. Jahrbuch f. die Ordnung von Wirtschaft u. Gesellschaft, hrsg. von Walter Eucken und Franz Böhm unter Mitwirkung von F. A. Hayek, Wilhelm Röpke, Alexander Rustow usf., Godesberg 1948 (I. Bd.), 1949 (II. Bd.)
- (12) 1) 新自由主義的見解の主要な部分、実はその以後の「自由」"industrieller Gesellschaftstypus" と國々の「自由」"自由主義の社会的研究の自由と現われつつある自由" 自由と歴史を説く。The man versus the state, in: Social Statics ... together with the Man versus the state, Edinburgh 1892, P. 269-412, ebd., P. 296-327.
- (13) その画期は一八六九年マンハッタンで結成された「自由主義」の「自由主義」(一八七五)の成立である。何故なら、その自由主義のマンハッタンで反自由主義主義と立つ労働者の奴隷を解放する自由と自由である。Vgl., Franz Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, Stuttgart 1909, III S. 349ff., W. S. 85ff.
- (14) 一八七二年には「ドイツ社会政策学会」が結成されたことは記憶に留めなければならない。Vgl., Franz Boese, Geschichte des Vereines für Sozialpolitik 1872 bis 1932, München 1939, SS. 6-11. さらに「カール・マルクス H. B. Oppenheim による「Karlheidersozialismus」(Berlin) 1872. のなかで述べた「論壇社会主義」がその学会に拠る人々の「マルクスター」に対する一般的な呼称となった。Adolf Wagner, Rede über die soziale Frage, Berlin 1872; Offener Brief an H. B. Oppenheim, Berlin 1872, Die Strömungen in der

Sozialpolitik und der Katheder- und Staatssozialismus, Berlin 1912, S. 13. 以下「講壇社会主義」の意味を説明せられて。オーストリアでは自由民主主義的基盤の上で中間的な社会政策が試みられた。主張者としては、Eugen von Philippovich, Michael Heinisch, Julius Öfner usw. など、それらに關する研究は、オーストリアでも充分におこなわれてはゐる。筆者の管見では、いさゝか文献があげられるところである。Eugen von Philippovich, Entwicklungsgang der wirtschafts- und sozialpolitischen Systeme und Ideale, in: Grundriss der Sozialökonomik, Tübingen 1924, 1/1. Wilhelm Weber, Wirtschaftswissenschaft und Wirtschaftspolitik in Österreich 1848—1948 in der Festschrift: Hundert Jahre österreichischer Wirtschaftsentwicklung 1848—1948, auf Veranlassung der Bundeskammer der gewerblichen Wirtschaft zum hundertjährigen Bestande der kammerorganisation, hrsg. von Hans Mayer, Wien 1949, S. 625f.

(15) ヴォーンの保守的な日記及び著「Vaterland」の主筆であつたフーバー・カール・フォン・ヴェーグザング「一八七五年「キリスト教社会主義」をとめた。彼の思想体系として」は、Ward von Kloppe, Die sozialen Lehren des Freiherrn Carl von Vogelsang, Wien 1894. Derselbe, Leben und Wirken des Sozialpolitikers R. Frh. v. Vogelsang, Wien 1930. Vgl. A. M. Knoll, Der soziale Gedanken, ebd. S. 91—97, 294—296. Derselbe, Karl von Vogelsang und der Ständegedanke, in der Festschrift zum 40 jährigen Jubiläum der Enzyklika

Retum novarum; Die soziale Frage und der Katholizismus, hrsg. von der Sektion f. Sozial- und Wirtschaftswissenschaft der Görres-Gesellschaft, Paderborn 1931, SS. 64—85.

二 フランス革命の波紋——ドイツ——

ところで、思想的な観点からいえば、いわゆる「資本主義」論の成立は、じつは前述の「資本」概念の構成によつてなしてゐるものとみるよりは、むしろ一七八九年のフランス革命をめぐり「ヘーゲル」「法哲学」の影響によるところが遙かに強かつたといふべきである。とういことは、たとえば「資本主義」を論じる場合における「市民」・「市民精神」・「市民社会」であるいはその対立物である「貴族」・「労働者」といった言葉の用法などを想ひ浮べるならば、一層はつきりとしてこよう。クノル教授は、ヘーゲルの「法哲学」を分析するにあたって、つぎのように述べている。すなわち、彼のみるところでは、歴史的にも理論的にも辯証法的対立におかれてゐる社会階級の三類型と三つのシンボル、三つの社会成層と秩序の型が指摘できる。(一)「貴族」の類型。「封建的」ということが、そのシンボルである。さらに、権力・血統・土地所有にもとづくピラミッド型の支配体系。それは旧制度の身分国家であり、上層身分・下層身分の二大社会層に人間群を配分する二分制身分社会が基盤となつてゐる。(二)「市民」の類型。

「*citoyen actif*」有産市民であり、「自由」資本主義「*der liberal-Kapitalismus*」がシンボル。端的にいつて、その典型はフランス革命の市民的一階級社会であり、その後市民が「行動的な国家市民」として活躍したことは、もはや絶えて久しいといえる。こうして成立してくる市民社会は、しかし有産者と無産者に大別される二分制市民階級社会である。(3)「労働者」の類型。いわゆる *citoyen passif*。「共產主義的」が、そのシンボル。(4)この表象のうちには、シュタインがすでに指摘したように、ブルジョアジーによる財産および国家権力の独占に対する反作用として、モンターニュの一階級国家への期待——それは「貴族」・「市民」の没落後に実現した——が、ふたたびプロレタリアという一階級のみの社会建設という試みになつて現われているということができよう。(5)いまこうした図式と関連づけてフランス革命を眺めるならば、それはやがてナポレオンおよび彼の制定した市民法典を通じて、有産階級ブルジョアジーの社会を生み落すことになり、かくて所有をめぐつて二つに分裂する階級、ブルジョアジーとプロレタリアートが、それにもかかわらず相互に「資本」と「労働」を提供しあふことによつて営まれざるをえない商品生産の孕む問題性、すなわち、いわゆる「資本主義」論の種子は、このフランス革命の過程のうちに、とくに鋭角的な仕方でもつてまかれていたとみなすことができよう。そして、資本と労働とが経済面では相互に共同しなければならぬ半面、社会面では両者が鋭く対立し

「資本主義」論の形成と展開

ているという、この逆説的な事態をはじめて最も鋭く定式化した人が、ヘーゲルであつた。彼は、こう述べている。(1)市民社会、すなわち市民のルーズなこの集団は「それ自身のなかに進歩発展する人口と産業」を内包する、専門性・利己心・個性の支配するシステムである。(2)またそれは、「諸個人の欲望を満たすことによる人間の、したがつてそのための手段を調達する様式の、相互連関を通じての一般化によつて、一方の極に富者を集積していき、他方の極に機械的労働に結合された階級の隷属性と貧困」を成立せしめる。(7)このヘーゲルの見解は、リカード派の賃銀＝利潤二律背反理論の借用であり、他面マルクスの集積＝貧困化理論の先取でもある。(8)ともかくもこうして市民社会ではブルジョアジー——ヘーゲルでは「工場主身分」——とプロレタリアート——ヘーゲルは少しく悲調を伴う「賤民」という用語でよんだが——の二階級が成立することになる。(9)「工場主身分」に協働する「プロレタリアート」は無所有であるから、「身分」を構成しないのである。ヘーゲルによれば、所有者だけが「身分」を形成できるのであるから、有産者ブルジョアのみが市民社会に属し、プロレタリアートはその意味でまさしく社会喪失 *gesellschaftlos* なのである。彼らは社会のメンバーからはずされ、彼らに固有の「共同態」を有していない。(10)つまりフランス革命がみずからの歴史過程のなかに顕示したことがらを、ヘーゲルは概念でもつて、表明したのである。クノル教授は、ここからヘーゲルがプロレタリアートを市

民社会の疎外態として扱えたことのうちに、歴史の世界でも概念の世界でも当時すでに市民的資本主義的社会の矛盾は露呈されていたとみるのである。⁽¹¹⁾

ヘーゲルは異常な熱意でもって、この運命的な歴史の進行からの脱出路をさがし求めた。だが、それは彼の問題視角からはむずかしいことがらに属していた。ことに「社会問題」に対しては、ルドヴィッヒと十六世のように何らなすべを知らないというほかなかったのである。彼の哲学体系を貫くイデオロギイは、市民社会の利害諸関係を概念的に体系化することにあつたのだから、社会問題の解決が、この「市民的」哲学者の体系の枠内ではきわめてむずかしかったのは、当然というべきであらう。彼の市民社会観の基調は自由放任であり、階級的諸利害の対立には無調停の立場にあつたのだから、プロレタリアートとしての存在を止揚する原理が、彼の体系の枠内で同時に成立することは、そもそもできない相談であつたといわなければならない。もちろん、ヘーゲルはこうした自由放任と無調停の立場から離れて国家による援助、労働の権利、最低生活の保障などを構想できた。しかし、この国家的干渉・援助および労働権は、ヘーゲルの適切な言葉でいえば、「市民社会の原理と個人の自律および榮譽の感情にそむく」ところのものであつた。そのうえ「労働権」が確立することによって「生産量は増加するだろうが、均衡のとれた生産と消費の関係が過不足の状態におかれると、そこに不幸が発生し、しかも増大する一方となる。」つま

り「工場主身分層」でなく、「賤民層」が増加することになるう。ヘーゲルがこの周知の命題をみずからどれほどの意味をもつて理解していただろうかという点とはともかくとして、つぎのように述べている。「市民社会は富が過大な場合、貧困の増大と賤民の作出を防止するに充分なほどに豊かでもなく、またその本来の財産を保持できるに足るほどでもないことは、誰の眼にも明らかになつてくる」。⁽¹²⁾

このように、彼は市民社会の内在的矛盾をある程度察知していたし、その点で一九世紀、二十世紀における反資本主義的な社会批判の思想の序章を書いた意義は否定できない。ただし、ここで「反資本主義的」という場合、それは「社会主義的」ばかりでなく、「保守主義的」な思想もまた含めて考えられている。なぜなら、プロレタリアートとならんで貴族層もまた「体系の外にある」、すなわち市民社会から疎外された存在だからである。

市民社会では貴族は、ただ有産者であるときにのみ、市民的に実存することができる。ところが、クノル教授のみるところでは、ヘーゲルの社会哲学のなかでは、貴族は支配身分層として、一七八九年のフランス革命のときのように完全に否定されてしまつていたのである。だから「貴族および従臣は、賤民と政治的無力を共有する。」こうして、ヘーゲルは市民社会の体系内でプロレタリアートと貴族の両者を否定し去ることを通じて、貴族的反革命とプロレタリア革命の、いずれからも免がれるこ

とができると考えた。ヘーゲルは社会問題の原理的な解決を断念した。⁽¹³⁾そして、プロレタリアートを運命の女神の手に委ねたのである。

ヘーゲルと同時代の、もしくは後につづくひとびとは、この帰結をさらに押し進めた。彼らはヘーゲル社会哲学における市民外的な基本要素すなわち貴族的な、またプロレタリア的な要因を、左右から、ヘーゲル右派および左派として「市民社会の主人公」に放火するためにとりあげた。ここにいわゆる「資本主義」論の内容をかたちづくる一切の要素は出そろったのである。というのは、ヘーゲルおよびフランス革命以降あらゆる政治的イデオログたちは、この貴族、市民、労働者の各層のいづれかを、みずからの思想的立場の正当化への究極の拠りどころとしたからである。⁽¹⁴⁾「貴族」層に拠って反市民的、反資本主義的立場を思想化したのが、ロマンティークをはじめとする一連の反体制的・保守主義的社会思想であった。ロマンティークでは、⁽¹⁵⁾アダム・シュラー Adam Heinrich von Müller の「die Elemente der Staatskunst」(1809) カトリック保守派的特質をもつ新ロマンティーク、たとえばフォーゲルサンク派 Vogelsang-Schule と中世のベネディクト派⁽¹⁶⁾ドミニクス派の思想・社会型態に触発されたアントン・オレル Anton Orel の「Oeconomia perennis」(1930) またいわゆる「die Wiener Richtungen」⁽¹⁷⁾や der österreichische Quadragesimo-anno-Staat 1934 bis 1938、それからオ

トマール・シュパン Othmar Spann の「der Wahre Staat」⁽¹⁸⁾(1921) などのシュパン派 Spann-schule、最後にイタリアおよびドイツのファシズム。⁽¹⁹⁾

この保守的社会思想のめざす目的は、身分制国家 Ständestaat である。ロマンティークにおいては、それは旧支配身分層の復活であり、労働と資本のパースナルな統一である手工業者ツンフトの再組織を意味した。⁽²⁰⁾新ロマンティークでは、「権威的」と「民主的」、「資本主義的」と「社会主義的」の中間にたつ開放的な体制が考えられた。ファシズムでも支配国家⁽²¹⁾政党的担い手として「血と肉」につながる新貴族が期待されていた。⁽²²⁾「身分」自体もまた、当然のことながら、さまざまに理解されていた。⁽²³⁾「身分」はロマンティーク、新ロマンティークでは国家以前の、国家と並んで、かつ国家外の職業共同体 Berufsgemeinschaft であり、国家の負担軽減をめざすものであった。⁽²⁴⁾ファシズムでも「身分」は、国家的な、国家によって組織され統制された協同体 Korporation であったし、ナチズムでは「身分」は、封建的な領主農場 Gutshof を原型として経営指導者と従業者によって構成される工場⁽²⁵⁾兵営であった。⁽²⁶⁾「2」プロレタリアの立場から思想化をおこなった偉大な思想体系としては、マルクスからレーニンに至る社会主義および共産主義である。同時代の必然的所産として考えられる目的は、生産手段の社会化による無階級社会の実現であり、その手段には西欧的および東欧的な見解の相違が生じた。西欧的なそ

「資本主義」論の形成と展開

これは社会民主主義であるが、⁽²⁷⁾クノル教授は東欧的なそれと、つぎの点では共通であるとみている。すなわち、*"distinction sociale"* の面では、市民的な財産配分と、*"distinction politique"* の面では政治的身分階層を単なる経済的事務官層に還元しようとする人間隷従制および人間の管理すべきはすのものが、逆に事物によって支配されている階級国家の廃止。ただ「西欧的」見解では、この不自由な政治的・社会的形態は政党政治による自由な意志形成を通じてのみ解消されねばならないとみなす点が異なっている。社会民主主義によれば社会的特権や特別待遇といったものを、政治的に特別に解決しようとする、それらの社会的・経済的諸利害の管理者は新しい「ブルジョアジー」に転化してしまうのである。すなわち、プロレタリア独裁からは、その独裁を遂行する担い手たる職業革命家および役人層によって結局は、プロレタリアート自身に對する独裁になってしまうと考える。

人民民主主義的な「東欧的」見解では、市民的な社会特権を全面的に克服し、社会主義的経済を整一的につくりあげるには、唯一の党による指導その前衛的役割、階層的編制が当分の間必要であるとなされる。クノル教授は、「ここでわれわれは、この見解のなかにプロレタリアートと彼らの意識が機構と組織を通じて、究極の状態である共産主義への歴史辯證法的な移行という基盤のうえで、無産者の層が今、明日には貴族の層たろうとする社会的な陶冶という事態を経験するのである」と

評している。⁽²⁸⁾

(一) Wilhem Schwer, *Stand und Standordnung im Weltbild des Mittelalters*, Paderborn 1934, S. 15, 17. Heinrich von Fichtenau, *Das karolingische Imperium*, Soziale und geistige Problematik eines Großreiches, Zürich 1940, S. 62 f., 179, 224f. Otto Brunner, *Abtliges Landleben und Europäischer Geist*, Salzburg 1949, S. 284ff. Friedrich Heer, *Aufgang Europas*, Studie zu den Zusammenhängen zwischen politischer Religiosität, Frömmigkeitsstil und dem Werden Europas im 12. Jahrhundert, Wien, 1949, S. 58f. 79, 107, 118, 129, 138, 165f., 173, 175, 270, 276, 280f., 298f.

(二) 「市民」を市民社会の社会学的研究として、クノルが指摘している。Thomas Hobbes, *Elementa Philosophica de cive*, Paris 1642 (独訳は「一八七三」)。John Locke, *Treatises on government*, London 1689, Adam Ferguson, *An essay on the history of civil society*, 1767, Edmund Burke, *A vindication of natural society*, in: *The works of the right honorable Edmund Burke*, London 1792, I, P. 53. 市民社会の二大階級分化という事態を、さき早く指摘した人は、Gaetano Filangieri である。Ders., *La scienza della legislazione*, Edizione Prima Veneta, Venedig 1782, II, P. 32f. それを挙示したのは、Mitschke である。Vgl., Robert Michels, *Psychologie der antikapitalistischen Massenbewegungen*, im: *Grundriss der Sozialökonomik*, ebd., 1926, K/I, S. 261.

クネル教授の言によれば、ヘーゲルの「市民社会」概念の最初の使用者は、シタマンの August Ludwig Schöler である。

A. L. Schöler, Allgemeine Staatsrecht und Staatsverfassungslehre, Göttingen 1793, S. 4 (Ann. 2), 63-78. Vgl., Georg Jellinek, Allgemeine Staatslehre, Berlin 1922, S. 85. 参考 W. Sombart, Der Bourgeois, München und Leipzig 1920, Joseph A. Schumpeter, Kapitalismus, Sozialismus und Demokratie, Bern 1946, SS. 198-212. Alfred Amon, Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie, ebd., SS. 353-383.

(c) Vgl., Lorenz von Stein, Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich, Bd. 1 1850, S. 88ff.

(4) ケーゲル・シタマン・ベルクスマンの「プロレタリア」概念以外の、それに関する文献として、Adam H. Müller, Von der Notwendigkeit einer theologischen Grundlage der gesamten Staatswissenschaften und Staatswirtschaft insbesondere, Leipzig 1819, Franz von Baader, Über das dermalige Mißverhältnis der Vermögenslosen oder Proletärs zu den Vermögen besitzenden Klassen der Sozietät, 1835, Heinrich Wilhelm Bensen, Die Proletarier, Stuttgart, 1847. 新ドイツ人 W. Sombart, Der Proletarische Sozialismus, Jena 1924, 1. SS. 86-115, II. SS. 99-120. Das Proletariat, Bilder und Studien, Frankfurt/M. 1906, Gatz Briefs, Das gewerbliche Proletariat, im: Grundriß der Sozialökonomik, ebd., 1926, K/1, SS. 142-240.

「資本主義」論の形成と展開

(c) L. von Stein, a. a. O., I, S. 131, 133ff., 144f. シタマンのこうした理解は「シタマンの独裁が、実は「労働者」というより「内部のプロレタリア」とプロレタリアへの分裂を孕む「小ブルジョア」を担う手となること」が、最近の研究によって明らかとなりつつある。これは古くと言わねばならないが、プロレタリア独裁の「思想系譜」をめぐるとする場合には、なお顧みるべきものがある。

(6) 周知の如く、ヘーゲルは「市民社会」を「国家」への対立概念として用いている（「悟性国家」）。その意味では自然法にもといて「カント・フンボルト・フィヒテによつて発展させられた法治国家・経済国家の系列に定位している」。したがって市民社会は、憲法・私法・経済的自由の体系である。Vgl., Nicolai Hartmann, Die Philosophie der deutschen Idealismus, Berlin 1929, II. Teil Hegel, S. 341. クネル教授は、ヘーゲルの「市民社会」概念について、ヘーゲルの場合中世の隷従性とくらべてはるかに自由な社会であるという面に概念構成の力点がおかれているとみるのであるが、ヘーゲルの「市民社会」をどう捉えるか、ヘーゲル法哲学体系は、かなりちがった相貌を呈することになる。金子武蔵「ヘーゲルの国家観」三九〇―四五九頁参照。

(7) Hegel, Rechtsphilosophie, 8. 243.

(8) Franz Rosenzweig, Hegel, und der Staat, München 1920, II, S. 125.

(9) Sven Helander, Marx und Hegel, Eine Kritische Studie über sozialdemokratische Weltanschauung, Jena 1922, S. 8.

sozialismus und ständestaat, Jena 1931. Walter Heinrich, Das ständewesen, Jena 1932. Hans Riehl, Kleine Einführung in die Gesellschaftslehre, Bucherei des ständestaates Nr. 8, Berlin 1934.

(61) 以下に引くは、すでに数多くの文献が我が国でも紹介されているが、オーストリアで顧みられているものを若干あげておく。Julio Evola, Heidnischer Imperialismus, deutsch von Friedrich Bauer, Zürich 1933; R. Walther Darre, Neuadel aus Blut und Boden, München 1930. Hans F. K. Günther, Das Bauerntum als Lebens- und Gemeinschaftsform, Leipzig 1939.

(20) たゞは、当時興隆しつつあった大企業を抑え、中小企業を保護しようとしたオーストリアの皇帝ロマンノ一世の経済政策とやの思想的背景を想起せよ。Vgl., Heinrich, Reschauer, Geschichte des Kampfes der Handwerkerzünfte und der Kaufmannsgremien mit der österreichischen Bureaukratie vom Ende des 17. Jahrhunderts bis zum Jahre 1860, wien 1860. Jakob Baxa, Einführung in die romantische Staatswissenschaft, ebd. (I. Aufl.) s. 135, 138 (Fußnote 2), 139 ff., 143 (Fußnote 2), 162 f.

(12) オーストリアの思想界に興隆した新ロマンティック・ペナ・ム Heinrich Pesch の「社会連帯主義」Solidarismus は基礎的なものである。Vgl., H. Pesch, Lehrbuch der Nationalökonomie, Freiburg i. B. 5 Bde. 1905—1923. 他方、ヘーゲンサングは「キリスト教社会主義」を唱え、その担い手に半社会

「資本主義」論の形成と展開

主義的な労働＝資本共同體としての職業身分（職分団体）を構想したが、ヘッシーの社会連帯主義は、やがてこの職分思想を資本主義的流通経済の原理として包摂し、中道を行く立場を明らかにした。この中道を行く考えが、オーストリアではとくにカトリック保守派と結合したことは、その経済的基盤と照応して興味深い。彼らは「身分」問題を社会政策的な問題と考え、いわゆる「資本主義」問題は単に生産技術上のこととみなして切り離したから、この意味での「資本主義」は新たな「身分秩序」社会のなかでもなお存続するものとなったのである。彼らの用法でいえば、問題の関心は「資本と労働」ではなく、「資本家と労働者」をどう組織の上で統一化できるかにそがれていたからである。クノル教授の資本主義類型論でいえば、新ロマンティックは第一の資本主義概念を採用することによつて、みずからの思想のうやむやに「中間層」の経済的利益を反映させたのであった。

(21) Vgl., Wilhelm Andrae, Kapitalismus, Bolschewismus, Faschismus, Jena 1933, S. 188. Werner Niederer, Der Ständestaat des Faschismus, München und Leipzig 1932, S. 35 ff, 59 ff. Edgar L. R. Rasen, Der Faschismus und seine Staatsidee, Berlin 1933, S. 72. Walter Adolf J. hr, Die ständische Ordnung, Geschichte, Idee und Neuaufbau, Bern-Leipzig 1937, SS. 284-293.

(22) Vgl., Justus Beyer, Die Ständeideologien der Systemzeit und ihre Überwindung, Darmstadt, 1941, SS. 341-363.

(23) Johannes Meßner, Die soziale Frage der Gegenwart,

- Innsbruck 1934, S. 569. 「きふた國家次郎のそとせり」° Ders., Die berufständische Ordnung, Innsbruck 1936, S. 67f., 69 f., 71 f. Ders., Das Naturrecht, Handbuch der Gesellschaftsethik, Staatsethik und Wirtschaftsethik, Innsbruck 1950, SS. 325-331.
- (25) Vgl., Giuseppe Bottai, Grundprinzipien des korporativen Aufbaues in Italien, Berlin 1933, S. 25 f. Adolf Menzel, Der Staatsgedanke des Faschismus, Wien 1935, S. 71 ff.
- (26) Vgl., Friedrich Bülow, Der deutsche ständestaat, Nationalsozialistische Gemeinschaftspolitik und Wirtschaftsorganisation, Leipzig 1934, S. 15. Rolf Dietz, Gesetz zur Ordnung der nationalen Arbeit vom 20. Jänner 1934, München 1934, S. 2 ff., 339. その第一巻では、「企業家や経営者の職務をその労働者や従事者への協力手段」と書かれてゐる。なお、クルネル教授がナチスの経営理念を「ロイセンのトンカー経営の構造と関連づけようとするのは、ナチスの社会的・経済的基礎を考へる上での一つの問題を提起しよう。なぜ、トンカー経営を一個の兵隊のいふとへみかなす見解は、マックス・ヴェーバーにおいて、すでに現れてゐる」°
- (27) オーストリアにおける「社会民主主義」研究の文献を記してをべ° Karl Lennér, Die neue Welt und der Sozialismus, Einsichten und Ausblicke des lebenden Marxismus, Salzburg 1946. Ders., Demokratie und Bürokratie, Wien 1946. Die Menschenrechte, 1948. ノンナーの死後、ハナック Jacques Hanak はその尸體を盗んだので「人」 Mensch und
- Gesellschaft, Grundriß der Soziologie, Wien 1952. Karl Czernetz, Der Sozialismus und seine Gegner, Wien 1949.
- (28) Franz R. Gugg, Die Sowjetbourgeoisie hat ein gutes Gewissen, Wien 1950. 「ソビエト連邦のソビエト」を云へる雑誌として、キーエフのソビエト社会主義労働者雑誌「Arbeiter-Zeitung, Zentralorgan der sozialistischen Partei Österreichs», 13. August 1950, Nr. 187, S. 5, 15. August 1950, Nr. 188, S. 1f., 26. August 1950, Nr. 197, S. 1 f. Boris Meißner, Der Wandel im sozialen Gefüge der Sowjetunion, in: Europa-Archiv, hrsg. von Wilhelm Cornides, Wien, 5. Mai 1950, V/9, SS. 2989-3004. Ders., Rußland im Umbbruch, Der Wandel in der Herrschaftsordnung und sozialen Struktur der Sowjetunion, Frankfurt am Main 1951.
- (29) A. M. Kroll, Das Kapitalismus-Problem in der modernen Soziologie, Wien 1950, S. 22. なお、クルネル教授の「社会財産を通じて作用する人間の自己疎外の止揚は、(共產主義と云ふのは) 同じような自己疎外の道程をとらぬものなりと云ふ」° 云々の見解にもとづいてゐる点は、留意を要する。Ders., a. O., S. 51. Anm. 87. キロメンの見解は、彼がラングレン S. Landshtut と「ペーヤー J. P. Mayer と協力して翻譯し、1933年「ライプニッツ」に出版した」° Karl Marx, Der historische Materialismus について云ふ。Vgl., Jakob Taubes, Abendlandische Eschatologie Bern 1947, S. 168 pp., 175 p., 180 p., 184 pp.

三 フランス革命の波紋

——フランスとイギリス——

前節でわれわれは「資本主義」論の成立史上、思想的にみて最も強い衝撃波となった「フランス革命」のドイツにおける余波を、ヘーゲルの「市民社会」論の展開に沿いつつ行きつくところまで辿ってみたのであるが、ここではフランスおよびイギリスにおける若干の思想上の波紋を眺めてみることにしよう⁽¹⁾。クノル教授は、その場合サン・シモンとオーギュスト・コントおよびハーバート・スペンサーをとりあげている。というのは、彼のみるところでは、この三人の思想家はいずれも市民的・資本主義的社会を歴史発展の最後の段階とみなしたばかりでなく、またそのことを経験と理論でもって証明しようとして試み、かくて独自の「市民社会」論を構想したからなのである。

サン・シモンおよびコントは、一八〇〇年前後の時代のなかに、人類は精神的には、神学から啓蒙思想⁽²⁾形而上学を経て実證科学に進歩するとともに、社会的には、戦士封建制から改革と革命を過ぎて一九世紀の市民的・資本主義的産業⁽³⁾平和体制へ発展するという、精神および歴史の法則、いわゆる三段階発展法則の「真理性」を読みとった。この両者における実證主義と資本主義の關係は、丁度マルクスにおける唯物史観と社会主義のそれに類比できるかもしれない。すなわち、(一)実證主義の面では、ニュートン以来の物理的・機械的な世界像を精神の究極的

「資本主義」論の形成と展開

な発展段階とみなし、資本主義の面では、資本主義つまり市民階級と産業体制を社会発展の最後の段階とする。(二)実證主義と資本主義を、革命と反革命、啓蒙とロマンティックの両極のあいだに浮動する時代における知性および社会の苦悩から脱却する方法であると考ええる。(三)精神的にも社会的にも封鎖的な中世社会のうちに、やがて来るべき改革の原像を求める。もちろん彼らは神学、キリスト教、また宗教一般を古臭いと考えたし、それに照応する社会と考えた封建制もいまでは時代おくれのものだとみていた。にもかかわらず、面白いことに、彼らはその当時の權威主義や、また唯一のイデオロギイおよび階級がみずからの絶対性を要求する、といったことを古臭いことがらだとは思えなかった⁽⁴⁾。ザロモンの表現をかりれば、彼らは「ブルジョア的・産業的経済秩序と近代自然科学の地盤のうえに、中世への復帰ではなくて、中世への進歩を」⁽⁵⁾夢見ていたのである。だからこそ、サン・シモンとコントは精神発展の第二段階である、啓蒙の諸思想家たちが主張するキリスト教の神に代る抽象的な理性の崇拜および封建制の身分階層原理に代る自由と平等の抽象的原理に対して、それが人間社会の結合を強化するうえに何ら有効でないとして強く反対したのである。クノル教授は、サン・シモンとコントの前述した社会思想の基調をなしている中世召還⁽⁶⁾という考えのうちに、フランスの「ブルジョア」類型が、ブルジョアジーの自由と平等への誓約にもかかわらず、独裁への傾斜、それへの偏好という事態をおぼろげながら示し

はじめているのではなくかと指摘する。フランス革命のあとで、勝利を占めたフランス・ブルジョアジー *citoyen actif* が、それまで封建貴族に抵抗するうえでともにバリエートをつぎ、平等と友愛の精神で手を取りあって進んできた労働者たちを切り棄てて、まもなくみずからの覇権をうちたてたように、ただ封建的・神学的体系をしめ殺すために自由と平等を呼びよせるサン・シモンの思想にはなほどこか同じようなシニシズムが流れているように思える。だから、彼のいう新社会では封建制の放逐とともに、自由と平等は失われてしまうことになるのである。なぜなら、このサン・シモンやコントの構想した社会は、世人の世界観の形成にあずかって決定的な力をもつ実証主義者、新社会を黄金の時代として讚美する芸術家、この社会に奉仕する教師、産業社会を指導する銀行家、工場主、有産市民から構成されることになるからである。ここにはサン・シモンのいう“*nationale Partei*”のみが存在し、“*antinationale Partei*”はまったく無意味となる。⁽⁶⁾たとえば、ただ消費するだけで少しも生産をしない貴族とか、生産はするが、幻想の生産でしかない僧職者、社会運営上有害な政治的立場に立つ啓蒙思想家、自然法学者、革命家とジャコバン派のひとびとなどが、そうである。以上を総括していえば、認識批判的にはサン・シモンやコントの市民的・資本主義的な、いうところの「産業体制」は、信仰や宗教的信念のドグマにでなく、「実証的な」学問のドグマにもとづいて中世を復活しようとする試み

であり、社会批判的には、封建制と貴族の地盤の上にでなく、産業体制と資本を有する市民を基盤として中世を再建しようとする試みである。⁽⁷⁾このようにみてくると、サン・シモンやコントがもくろんだ実証主義的・資本主義的社会は、形容矛盾ではあるが、キリスト教なきカトリック、貴族なき封建制、市民の絶対的な支配体制、歴史における終局の社会であるといえそうである。

ところで、生物学的社会学の古典的な体系家ハーバード・スペンサーもまた、生物学とのきわめて強い類似において、右の両者と似たような結果に到達した。⁽⁸⁾彼は歴史発展の内部構造を生物の構造に対比させつつ考える。(1)内胚葉 *Entoderm*、内腹壁、生存準備装置。(2)外胚葉 *Ektoderm*、内体、生存斗争装置。(3)外胚葉・外的細胞層から生物の体内に緊密につたわっていく神経組織。スペンサーは生物のこの構造が、社会の内的構造と照応するとみなした。(1)内胚葉Ⅱ生計組織。(2)外胚葉Ⅱ戦争組織。(3)神経組織Ⅱ戦士層の地位に由来する原始群の統制Ⅱ統治組織(それは端的にいうと、国家である。国家は戦争と戦士が創ったものであり、社会の外的・内的諸力を攻撃と防禦に出そろわせる強制組織なのである)。スペンサーは原始的な生物体ではただ一つの神経組織が内・外胚葉、内外細胞層を統制しているように、原始的な社会組織ではただ一つの命令系統が群 *Horde* の内・外的生活を統轄していると考えた。彼によれば、酋長の地位こそ外には戦争を、内には経済を統べてい

る点から、この原始生物の神経組織に、したがってまた原始国家単位にあたるものであった。より高次の発展段階で、この神経組織（生物）、統治組織（社会）は分化しはじめる。生物の場合には、運動神経系と交感神経系に分化する。社会の場合には、本源的な単一酋長制から戦争酋長と商工業酋長に機能分化する。スペンサーは豊富な民族誌の知識を駆使して、経済制度と国家制度、政治支配と産業支配が原始群では独りの酋長に集中されていたが、歴史の発展につれて分化していった過程を追求するのである。ところが、彼のみるところでは、この発展過程は決して原始社会の場合にのみ現われたものではなかった。同じような現象がヨーロッパでは封建制から資本主義への発展に際して生じたのである。封建社会はやはり単一の国家および経済支配を特徴としており、中世の所領では領主あるいは貴族が一切の政治的・経済的問題の絶対権力をにぎっていた。⁽⁹⁾しかし、フランス革命以降は、全ヨーロッパにわたって国家の統制が減退した。この勝利を占めた資本主義の時代には、経済は自律的な単位となつて、政治とならんで成長をとげる。資本主義社会では国家行政と経済管理の分離が特徴である。だから、スペンサーの考えでは、原始社会から産業社会へ、また封建制から資本主義への発展ならびにそれと照応する常時戦争体制から平和体制への発展という歴史の必然的法則によって、強制組織としての国家は枯死することになる。彼は社会主義は一種の強制的社会であり、原始的また封建的状态への復帰なのだと思う。

「資本主義」論の形成と展開

ていたから、国家が社会主義的社会的の成立によって消滅するとは想像もできないことであつた。国家はむしろ歴史の終局的段階を示すと考えられた諸個人相互の契約関係および自由に立つ資本主義的な労働および交易社会的の成立によって死滅すると、スペンサーはみたのであつた。⁽¹⁰⁾

(1) クノル教授がヨーロッパ社会思想の展開を問題にする場合、これまでの叙述から明らかなように、フランス革命をその軸心においてよいことは、留意してよい点である。その構想がある点で近代ヨーロッパ思想史を、ヘーゲル哲学とその解体という方向で捉えようとするレヴィットの立場とつながるものがあるように思われるのも興味深い。

(2) クノル教授のこの指摘は、たしかに示唆に富んでいる。だが、問題はマルクスの場合には社会主義建設の担い手はプロレタリアートとして明確に措定されたのに比し、サン・シモンやエントの場合担い手を単純に「市民階級」であつたと割り切れるであらうか。デフォーやスミスの市民像に比べて、彼らのそれに中世召遣、die Berufung Mittelalter の暗影が奇妙に屈折して入っている点は、どう説明されるべきであらうか。それはイギリス・ブルジョアジーに対するフランスのその歴史的性格といえるだろうか。要は、彼らが時代の問題をどのような視角から捉えようとしたか、にかかわってくることである。

(3) Saint-Simon, Nouveau Christianisme, 1825, in: Claude-Henri de Rouvroy, comte de Saint-Simon (†1825) et d'Enfantin; Oeuvres, Paris 1865-1878, PP. 97-192. 以下「新キリ

「資本主義」論の形成と展開

「キリスト教」はキリスト教の立場からみれば、その標題にもかかわらず愛と労働の福音のみがとりあげられ、いわば市民的・産業的時代精神に適応した世間道德の書になっている。

(4) Saint-Simon, ebd. XXI, P. 236 ff. 以下「catechisme national」の創造が説かれてゐる。Auguste Comte, Cours de Philosophie Positive, Paris 1864, W. P. 544 f. 彼は以下「カトリックが中世で果たした役割を、新社会では実証主義がやるべきである」と述べている。

(5) Gottfried Salomon, Das Mittelalter als Ideal der Romanik, München 1922, S. 121.

(6) 以下「nationate Partei」を「antinationale Partei」とし、彼の有名な「政治の寓話」Parabole Politique, Oeuvres, ebd. XX, P. 17 ff. に引く。以下「nationate Partei」には、肉体労働者もまた属しているのである。彼らは産業体制の成員である。しかし、経済的にも政治的にも指導する側にはなかつた。

Vgl., Saint-Simon, ebd. XX, P. 150 ff. サン・シモンは、はつきり述べている。「(社会組織の)問題は一般民衆のために解決されることである。しかし、(その場合にも)彼らはやはり単に表面的、消極的な存在にとどまることだろう」と。以上の問題については、ジイド・リスト「経済学説史」(上)(宮川貞一郎訳、東京堂)三九一頁以下を参照。Vgl., Otto Warschauer, Saint-Simon und der Saint-Simonismus, Leipzig 1892, S. 16 ff.

(7) サン・シモン、コンテの、このイメージにみられる封建制と資本主義の奇妙な混淆にもかかわらず、クノル教授はマックルの研究(Friedrich Muckle, Henri de Saint-Simon, Jena, 1908,

S. 203 f. によりつゝ、彼らの思想を上昇しつつあるブルジョアジーの代弁者として、産業経営を指導していく社会層の支配を正当化しようとするものであると考へている。だが、この点は改めて新社会の構成メンバーの性格から検討されなかつた必要がある。ことにシスモンディとの思想上の関連を念頭におくとき、その自営農民像にまつた家父長制、性格の問題がここで強く浮びあがってくるのである。さしあつて、ガローディ「近代フランス社会思想史」(平田清明訳、ミネルヴァ書房)、一二〇—一二二頁。なお、一九五七年、土地制度史学会の平田清明氏「シスモンディ」に関する興味深い報告を参照されたい。

(8) Herbert Spencer, the Principle of Sociology, 3 vol. 1876-96.

(9) このように言いすぎるのには、今日の研究水準からみて、問題が生じるであろう。しかし、スベンサーの狙いは軍事的・封建的社会から平和的・産業的社会への発展が、原始社会における発展過程とパラレルに論証されることにあつた。彼にとつては「市民社会」の優越性が「客観的」に明示されなければならなかつたからである。この点に関連して附言するならば、思想史の興味は、その思想が果して実証的であるか否かに力をそぐということよりは、むしろどういふ問題意識をたずさえて事態を見すえていたかを明らかにしていくところにあるのではなからうか。

(10) スベンサーは経済原理を「競争」と「指導」に大別し、社会主義は後者に立つものである、生産者はそこで何を、何処で、如何に、どの時間になさねばならないか、ということからはじまつて、衣食住のすべてが国家によつて配慮されるから、上位の人に

従順にならざるを得ないと論じている。この点をとらえて、オッペンハイマーは、スベンサーの社会学はもう用をなさないと批判したのである。Vgl. Franz Oppenheimer, System der Soziologie, 1/1, S. 30. しかし、スベンサーの思想は、一方でドイツの社会学者たちにかんがりの影響を与えている。Vgl. Ferdinand Tönnies, Herbert Spencers soziologisches Werk (1889), in: Soziologische Studien und Kritiken, Jena 1925, 1, P. 76. Leopold von Wiese, Zur Grundlegung der Gesellschaftslehre, eine kritische Untersuchung von H. Spencers System der synthetischen Philosophie, Jena 1906, S. 139. たとえば、テンニエスのゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの二段階論は、スベンサーのような明るさをもたないとはいえず、やはり類似する何物かがある。多くのブルジョア思想にこういった近代↓近代の二段階、発展論がみられるのは、どういう理由からであらうか。その意味で、サン・シモン、コントに比し、イギリス資本主義を背景にもつスベンサーには前近代性への否定が強く現われる代りに「近代」否定がみられないのに対し、前者ではそれが逆に「近代を超えるもの」への展望とむすびついて出てきている点は、それぞれの「危機」意識の構造的差異を示すものとして興味深い。だからこそ、またサン・シモンズムから社会主義につながる線もでてくるのであらうが、その関連は決して直線的ではなかった。それにはヘーゲルにみられるあの歴史意識が、歴史発展の思想が、社会進化の思想を止揚する契機として登場してこなければならなかったのである。

「資本主義」論の形成と展開

四 マックス・ウェーバーの「資本主義精神」論

ところで、「資本主義」論の検討をとじるにあたって、おわりにどうしても扱わなければならぬほど密接な関係を有しているテーマに、「資本主義の精神」問題がある。クノル教授は、その問題の系譜を辿るならば、観念ではなく経済過程こそが「現実」の形成者なのだというマルクスのヘーゲル批判（二八五九）にまで遡りうると考えている。しかし、いうまでもなく、決定的にはそれはどの程度まで精神的な、とくに宗教的な生活態度というものが、特定の経済発展に対して構成的要因でありうるか、という原理的なかたちでこの問題を提起したマックス・ウェーバーの有名な論文とともにじまったといえよう。ということは、必ずしもウェーバーが歴史Ⅱ社会における精神的なものの優位についてのヘーゲルの命題を復活させようと意図したことを意味するものではない。そうではなくて、今日の学問状況からみるならば、彼がこのことによって宗教社会学および知識社会学の分野に主要な問題を供給し、さらにやや袋小路の感のあつた「資本主義」論に対して新たな展望を与えることに成功した点が、重要なことなのである。彼がそこで説明しようとしたのは、人は永遠の至福にか、もしくは永劫の罪にか、そのどちらかにそもその始めにおいて神の聖なる決断によって決められているというカルヴァンの預定の教理が、

「資本主義」論の形成と展開

カルヴィニストの魂のうちに「資本主義精神」をしのびこませる結果になったという点であった。もちろん、それは直接にではなく、クロムウェルやバクスター、ステイールその他多くのひとびとを通じて間接に、滲透していったものではあるが。なぜなら一七世紀の実効的なカルヴィニストの代表者たちは、諸個人が神に選ばれるための指標は何であるか、誰が選ばれるか、自分は本当の恩寵のもとにあるか、などカルヴァンの神学が充分にもししくはまったく答えていない、しかし日常生活のうえでは絶えず関心のもたれる實際問題に解答を与えなければならなかったからである。それは絶え間ない職業（召命）労働によって宗教的な懷疑を解消させ、選びを確信させるかたちで遂行された。⁽⁵⁾ 選びの内面的徴表として労働の喜びが、心理的確信として「資本」が何らかの「労働収益」のごとくに、また外面的徴表として聖礼典が現象することになった。「利潤」追求がトマス主義やルッター派の社会倫理とちがって禁じられないばかりか、命令されるに至る。⁽⁶⁾ とともに、資本家に上昇しなかったひとびと、すなわち労働者は当時の民衆語でいう「衰れた奴 armer Teufel」であるばかりでなく、神によって永遠の罪におとされた「選ばれざる者」となってしまった。こうして、カルヴィニズムは資本主義の熱情、願望、神学をあらわし、また適正な利潤獲得への欲求、奢侈と消費の節約は、カルヴィニストの宗教的態度となる。それこそはウェーバーのいう「世俗内的禁欲 die innerweltliche Askese」であり、すでにウォルテール

が「ジュネーヴでは、人は計算ばかりし、一度も笑ったりしない」と記した雰囲気であった。このジュネーヴでみられた計算だかさ、宗教的生真面目さ、計算への激情、カルヴァンの良心でもって課せられた剰余労働と剰余収益への衝動、この全体がいわゆる「資本主義精神」をかたちづくるのである。マックス・ウェーバーの「カルヴィニズムと資本主義」論は、一方では封建経済の崩壊、他方では自由な資本投入と資本利得をめざす資本主義経済建設の問題を内包している。その点ではカルヴィニズムと似かよったコーランの予定説に立つイスラム教徒たちが、戦争による絶え間ない膨脹と征服という死の影のなかに神の選びをみたのと対照的である。カルヴィニストは「拘束された」経済を打ちこわし、「自由な」経済（産業の自由）を望み、このなかに自らの選びの刻印をみようとしたのである。その意味では、そもそも彼らは資本主義体制以外には神の恩寵、したがってまた自らの選びを証明することができないのだ。

クノル教授のウェーバー「資本主義の精神」論理解は、カトリックの立場にたっているにもかかわらず、以上にみたかぎりではかなり正確であるように思われる。ところが、このような理解の上で試みられた彼のウェーバー批判には、根本的な点で若干の問題がある。したがって、つぎにその点に関する彼の論旨を紹介しよう。まず最初に、彼は従来試みられたウェーバー批判を大きく二つに分ける。第一はウェーバーは資本主義発展

史上におけるカルヴィニズムという観念的要因を過大評価し、しかも「資本主義精神」を實體化してしまっているという方法論的批判である。⁽¹⁰⁾ 多少言いかえると、資本主義的経済秩序が資本主義精神によって形成されたごとくに歴史を把握することは、まったく不当であるというのである。だが、クノル教授は、こういった批判、すなわちウェーバーの「カルヴィニズム」資本主義「論は何らかの社会形而上学であろうと望んだのではなく、ただ理念型的に構想された概念だとしてしまう批判を、これまで論議されてきた「資本主義」問題の何たるかを方法論的にまったく見のがしたものだとする。クノル教授のこの見解は、筆者もただしいように思える。第二の批判はカルヴィニズムとともに別の精神的な要因も資本主義発展の説明根拠としてあげられるべきだという実証的批判である。ゾムバルトは高期スコラ学派の精神、トマス主義の生活合理化に関する定律から資本主義の発展を説明しようとしたし、⁽¹¹⁾ ショーンブルクはヒューマンイズムの教養理念から同様のことを試みた。⁽¹²⁾ また多くの唯物史観にたつひとびとは、宗教は単に経済の「上部構造」にすぎないと主張した。こうした見解はそれぞれ一理あるにしても、ウェーバーの真意とはへだたっている。ところが、この点に関するクノル教授の立場は、こうした通説的な批判とは少しく異なるところを指向しているようである。

彼は自らの研究にもとづいて、「カルヴィニズム」資本主義」というウェーバーのテーゼは、プロテスタンティズムの国々の

「資本主義」論の形成と展開

資本主義的發展に対してのみ、妥当するのであって、カトリックの国々にはあてはまらないと主張する。⁽¹³⁾ そこでの資本主義發展は、まったく別個の経過を辿ったのである。たとえば、ジェスィット派のひとびとは一五七五年から一七六八年にかけての約二〇〇年間、バイエルンのインゴルシュタットにある彼らの大学でずっと経済的自由、とくに利子の自由、Zinsfreiheitのために闘ってきた。彼らは、そこではカルヴァン派の場合と同じく資本主義發展を道德的に支持したのである。⁽¹⁴⁾ 興味深いことに、ジェスィットのひとびと、Gregor de Valentia († 1693)、Jakob Grester († 1625)、Adam Tanner († 1682)、Christoph Haunold († 1689)、Vitus Pichler († 1736)、Franz xaver Zech († 1768)、Joseph Biner († 1778)、などはその経済的自由の主張のために、カルヴァン派がルッター派と闘ったように、⁽¹⁵⁾ ドミニクス派と斗わねばならなかった。というのは、カトリックではドミニクス派がプロテスタンティズムのルッター派と同様に貴族・領主の城や村落、小都市、また小経営を勢力基盤としており、それに対してジェスィット派はカルヴァン派のデュネーウにおけるごとくに、⁽¹⁶⁾ アウグスブルクの大商工業資本に拠っていたからである。疑いもなくドミニクス派とルッター派の「経済」保守主義とジェスィット派およびカルヴァン派の「経済」自由主義は、もとよりそのみにはないが、前記のような歴史的・社会的諸事情によって共働して規定されていたのであり、この観念的・精神的な面が逆に経済によ

「資本主義」論の形成と展開

って規定されるという側面は、彼のみるところでは、やはりウェーバーの「論文」では看過されていたところであった。⁽¹⁷⁾ クノル教授は、さらにルッターの偉大な敵であったヨハン・エックから、カルヴァンは資本と利字の自由に関する自らの理論をつくりあげたであろうという事情を論証する。⁽¹⁸⁾ エックは宗教的にはきわめて保守的であったが、経済問題には革命的で、⁽¹⁹⁾ ものごとを「資本主義的」に考えていたという。面白いことに、ルッターは宗教においては甚だ革命的であったが、経済問題では保守的・封建的、「反資本主義的」であった。⁽²⁰⁾ こうしてまったく同時に、ルッターは宗教的・革命的諸命題をウィッテンベルク大学の扉にはりつけ、エックはその経済的・革命的諸命題をウィーン大学の扉に掲示したということになる。⁽²¹⁾

以上の事実は、ある経済秩序を宗教が創りだしたというかたちで宗教と経済の間の因果関連を認めようとする立場、いってみれば「資本主義」問題をひたすら世界的に理解しようとする望むことが、いかに問題をはらんだ企てであるかを証明している。⁽²²⁾ と同時に、また、ウェーバーがただしく力説したように、経済と社会における精神的な要素、端的に「精神」がそのまますぐに社会的・経済的な事態のなかに解消されてもならないのである。すなわち、問題はこうである。「精神」は一切の「経済」を超えて自らの望む方向に吹くのではあるが、だからこそまた「精神」は結局において、具体的な秩序に対して「義的な責任があるのではない。観念的要因も物質的要因も、ともにひと

しく「経済社会史の絨毯を織りあげるのであるから」。⁽²³⁾ だが、このような仕方では「精神」と「経済」が切り離されて扱えられるとき、クノル教授の「資本主義」概念は、結局においてははじめにかかげた教授自身の分類による第一の類型に属することになるのではなからうか。

(c) Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, in: Archiv f. Sozialwissenschaften, Sozialpolitik, ebd. 1905, XX, SS. 1-54, XXI, SS. 1-110. 6
も「宗教社会学論集」第一巻に収録された。邦訳は大家・梶山訳(岩波文庫)と阿部行蔵訳(河出書房)とある。つぎに従来の研究史でみのがされていたと思われる文献を若干あげておく。

Emile de Laveleye, Le Protestantisme et le Catholicisme dans leurs rapports avec la liberté et la Prosperité des Peuples, Brüssel 1875, 以下この問題を扱った最初の文献とせう。英訳もある(W. F. Gladstone, Protestantism and Catholicism, in their bearing upon the liberty and Prosperity of nations; London 1875. Ludwig Elster, Johann Calvin als Staatsmann, Gesetzgeber und Nationalökonom, in: Jahrbücher f. National-ökonomie u. Statistik, ebd. 1878, XXXI, SS. 211-222. 彼はユング・カルヴァニズムと産業発展の因果関連を明確に指摘した。

(c) Vgl., Paul Honigsheim, Max Weber als Soziologe, in: K. Iner Vierteljahrs schrift f. Sozialwissenschaften, Reihe A: Soziologische Hefte, München 1921, S. 33

(c) J. A. Möhler Symbolik oder Darstellung der dogmatischen Gegensätze der Katholiken und Protestanten nach ihren Öffentlichen Bekenntnisschriften, hrsg. von Franz Xaver Kiefl, Regensburg 1924, S. 99 ff., 117 ff. G. Hoennicke und E. F. Karl Müller, Art. "Prädestination" in: Albert Hauckeschen Realenzyklopädie f. protestantische Theologie u. Kirche, Leipzig 1904, XV, Sp. 581 ff. Ernst Troeltsch, Art. "Prädestination", im Handwörterbuch: Die Religion in Geschichte u. Gegenwart, ebd. W, S. 1696 ff.

(c') J. Calvin, Corpus Reformatorum XXIX, P. 883 ff. Max Scheide, Calvins Prädestinationslehre, Hall a. S. 1897, S. 30 f. Paul Wernle, Der evangelische Glaube nach den Handschriften der Reformation, Tübingen 1919, III (Calvin), S. 231 f. P. Lobstein, Die Ethik Calvins, Straßburg 1877, S. 23, 25. August Lang, Zwei Calvin-Vorträge, Gütertrage 1911, S. 23, 27.

(c) Karl Holl, Die Geschichte des Wortes Beruf, im Sitzungsberichte d. preussischen Akademie der Wissenschaften Berlin 24. Jänner 1924, SS. XXXIX-LVII. Karl Dunckmann, Die Lehre vom Beruf, Berlin 1922. 「職業」 職名と宗教的意義を結びつゝ愛ひなむことと主観的な働きを結びつゝ宗教的 Resch, Lehrbuch der Nationalökonomie, ebd. 1909, II, S. 725 ff. カルベットの宗教・資本・利子論について Ludwlg Elster, a. a. O., SS. 188-203. Eugen von Böhm-Ba-

werk, Kapital und Kapitalzins, ebd. 1, S. 23 f.

(c) 「職業観論」 についてハ・マ・ア・ル・マンの相違について Haus Baron, Calvins Staatsanschauung und das konfessionelle Zeitalter, München 1924, S. 11. マ・ア・ル・マンの経済的観生活と経済的観、マ・ア・ル・マンの資本主義的功利精神のつかぬる痕跡を認めるべきである Robert Linhardt, Die Sozialprinzipien des hl. Thomas von Aquin, Freiburg i. B. 1932, S. 197 f. 208.

(c') Felix Rachfahl, Calvinismus und Kapitalismus, in: Internationale Wochenschrift f. Wissenschaft, Kunst u. Technik, hrsg. von Paul Hinneberg, Berlin 1909, S. 1218.

(c) マ・ア・ル・マンの「資本主義の精神」 論をうけて理解した点に充分に語頭をたゞす必要がある。ただ彼の経済理論（＝市場形成論）と結びつゝた点に注目する点に、問題が残るべきである。それは恐らくマ・ア・ル・マンの「社会理論」の性格（＝社会学的視角）と関係している。

(c) Bernhard Spieß, Die Prädestinationslehre des koran, Weiburg 1873, S. 314.

(c) マ・ア・ル・マンの Oswald von Nellbreuning S. J., Entwicklung und Struktur des kapitalistischen Geistes, in: Abendland, Monatshefte f. europäische Kultur, Politik u. Wirtschaft Köln März 1928, III/6, SS. 168-171.

(c) W. Sombart, Der Bourgeois, ebd. S. 306 ff., 311 ff., 315. マ・ア・ル・マンはマ・ア・ル・マンの批判とマ・ア・ル・マンの「みれば、他方のプレッシャーなどの説との折衷（彼は綜合とマ・ア・ル・マンの「みれば」を考へつゝたのである。だが本来和解し難い

「資本主義」論の形成と展開

二一八

この両学説のあいだで彼は結局トニーとともにヴェーバー批判の系列に属してしまふことになる。ヴェーバーのゾムバルト批判は「プロテスタンティズムの倫理」の論文以外でも処々に述べられている。たとえば、「独自の手工業者の宗教的態度は古代キリスト教の始めから存在した」(Ders., *Wirtschaft und Gesellschaft*, 3. Aufl., S. 275.) また「カトリック教会が奨励した心的態度は、非資本主義的であり、部分的には反資本主義的でもある」(Ders., a. a. O., S. 803.)

(12) Ferdinand von Degenfeld-Schonburg, *Geist und Wirtschaft*, Tübingen 1927, S. 133.

(13) A. M. Knoll, *Der Zins in der Scholastik*, S. 147, 154 u. s. f.

(14) Ders., a. a. O., SS. 147-154.

(15) Ders., a. a. O., SS. 69-79, 106, 112. Vgl. Ders., *Der Widerspruch von Theologie und Soziologie bei Martin Luther*, in: *Wijsenschaft u. Weltbild*, ebd. 1960, III, S. 14.

(16) ここにはクノル教授による「宗教改革」陣営と「反対宗教改革」陣営の両者に貫いてみられるパラレルな傾向の、みごとな社会学的類型構成がみられる。ただ、教授の場合宗教上の勢力配置の社会的規定にまで問題を掘りさげながら、そのなかに打ぎ込まれている経済的利害の分析へとすすんでいないために、商工業都市デュネーヴとアウグスブルクの「資本」が同じ性格のものとして扱えられてしまい、教授の鋭い分析がヴェーバーの意図した方向とかなりのへだたりを示すことになったのは、惜しまれるところである。こうして、ジュースイット派の「自由」も、カルヴァ

ン派の「自由」もともにひとしく「経済的自由」で一括されてしまい、その「自由」のなかにいかなる階級の経済的利害が反映しているのか、遂に分析されないままにおわってしまふことになる。(17) この評価はやや早まった感がある。第一にヴェーバーの論文はなによりもまず「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の因果連関を証明することにあつたのであり、それと「資本主義」との因果連関を論証することにあつたのではないからである。また、それを離れて考えてみても、ヴェーバー「世界宗教の経済倫理」では、明らかにいろいろた側面が鋭く追求されているからである。それはまた、第四版「経済と社会」目次中「宗教社会等」の項が、ヴェーバーの原フランドムと「Klassenbestimmtheit der Religionen」の追求にやがてうかつから明らかになつてゐる。

(18) Vgl. J. Schneid, Dr. Joh. Eck und des Kirchliche Zins-verbot, in: *Historisch-politische Blätter*, München 1891, CVII, S. 808. ただし「うづり論証は『理論(あるいは概念用具)の継承と発展』という問題にまつわる難点がつねに存在するのであつて、この場合もその例外ではない。

(19) A. M. Knoll, *Der Zins in der Scholastik*, SS. 143-147. Vgl. J. Strieder, *Studien zur Geschichte kapitalistischer Organisationsformen*, München 1914, S. 121f. J. Schneid, a. a. O., S. 241f., 321f., 570f., 659f., 789f., 808ff.

(20) ルッターの社会観にみられる「反動的」傾向は、すでに以前から多くの人によつて、神学的、社会学的、歴史学的なさまざまな立場から指摘されてきた。Frank G. Ward, *Darstellung und*

Würdigung der Ansichten Luthers vom Staat und seinen wirtschaftlichen Aufgaben, Jena 1898, S. 101. E. Troeltsch, Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie, ebd. S. 199, 200 f., 789. Ders., Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen, ebd. SS. 549-553. W. Sombart, Der Bourgeois ebd. S. 323. W. Sohn, Die Soziallehren Melancthons, in: Historische Zeitschrift, hrsg. von Fr. Meisner und F. Vögler, München und Berlin 1916, CXV, S. 69. ハッサーの「基督教」態度を嘆き非難した文獻として Gustav Schmoller, Zur Geschichte der nationalökonomischen Ansichten in Deutschland während der Reformationsperiode, in Zeitschrift f. die ges. Staatswissenschaften, ebd. 1860, XVI, S. 692. Karl Benrath, Aonden christlichen Adel deutscher Nation von M. Luther, Halle 1884, S. 109 f. ハッサーの「反資本主義的」エッセイをめぐり強調した文獻として Georg Wünsch, Evangelische Wirtschaftsethik, Tübingen 1927, S. 321, 687 f. K. Marx, Theorien über den Mehrwert, hrsg. von K. Kautsky 1910, III, S. 586 ff. 591. S. Göhre, Die evangelische-soziale Bewegung, Leipzig 1896. Friedrich Log, Der Regensburger Wucherstreit, Eio Beitrag zum Kampfe des Luthertums gegen den Kapitalismus, in: Beiträge zur bayrischen Kirchengeschichte, Erlangen 1925, XXXI, SS. 3-28.

(12) しかし、ヴィーン大学はエックの見解を公けの討議するのを拒んだのであった。Vgl., Theodor Wiedermann, Dr.

「資本主義」論の形成と展開

Johann Eck, Regensburg 1865, S. 63 ff. J. Schneid, a. a. O. S. 790 ff. R. Albert, Aus welchem Grunde disputierte Johann Eck gegen Martin Luther in Leipzig? in: Zeitschrift f. die historisch Theologie, Gotha 1873, XII, S. 388 f.

(22) ハッサーの「宗教的」態度を嘆き非難した文獻として Gustav Gundlach, Zur Soziologie der Katholischen Ideenwelt und des Jesuitenordens, Freiburg, B. 1927, S. 3. 彼が「宗教的象面」や世俗的象面のあつた「因果連関」を認めようなら「同じ見解は」J. B. Kraus S. J., Scholastik, Puritanismus und Kapitalismus, München und Leipzig 1930, S. 11. ハッサーのカトリックの思想家たちは「同じカトリックでもハッサー教授の見解が少しく異なっている点」は「ハッサーの行論が必ずしも明らかでない点」である。

(23) だが、たとえクノル教授がこの点で「見ザ・パー」とまったく同じ歴史観に立つていたに思われても、私見ではやはりかなり違いがみついているのであつて、この点は「世界宗教の経済倫理」に関する諸研究に展開されているヴェーバーのエッセイ論が究極においてすべて「生産力論」としての性格を有していることからも察知できるであろう。

五 つの び ―― 若干の問題点 ――

以上、クノル教授の「資本主義」論は、さまざまな問題を提起するのであるが、個々の点では筆者もすでに註で私見を加えて論じしたので、ここでは今後の研究への心覚えの意味でこ

「資本主義」論の形成と展開

く大づかみな問題を、幾つかとりまとめて書き記しておくことにしよう。

一つは、つぎの点である。クノル教授の「資本主義」論は、フランス革命がヨーロッパ各国（とくにドイツ・フランス・イギリス）の思想界にまき起したさまざまな波紋を追求するということからです。めづまれているのであるが、そのために「資本主義」概念の類型論でスミスがとりあげられるにとどまらず、ピューリタン革命およびアメリカ独立戦争が彼の問題の視野に入ってきていないという点である。想うに、これは彼の思想的立場と深くつながるところがあるのであって、彼の問題の、たて、方から「資本主義」概念の形成と展開をジャーナリストイックなそれからアカデミックなそれへの推移において把握しようとする、そして、最後にそれをウェーバーの「資本主義の精神」論を媒介にしてイデオロギーギッシュな概念から解放しようとする試みのなかに現われているといえよう。これは、つぎの問題に関連してくる。彼の関心からイギリス革命が脱落することにより、「資本主義」論は、ひとつの、しかし筆者のみるところでは致命的な限定をうけることになる。すなわち、ウェーバーの「資本主義の精神」論でとくに力点のおかれたイギリス・アメリカの「資本主義」が示す独自の性格が、遂に正面からとりあげられて問題にされないままに終わったから。こうして、第三に彼のウェーバー批判もまた、少しく的はずれにおわらざるをえなくなってしまう。というのはウェーバーの「資本主義の精神」が

二二〇

どのような歴史的性格を示す社会層（歴史の構成本体）によって担われたかというウェーバーにとって基底的な問題が、彼の視野から消え去ってしまうことになるからである。換言すれば、彼の場合ウェーバーの特殊近代的な「資本主義」概念がこの意味で結局は充分に理解されていないのであって、このことはまた、彼の「資本主義」論がヨーロッパ資本主義（イギリス・アメリカは非ヨーロッパ的）を中心に展開されていることとむすびついている。だから、結局問題は相互につながりをもちつつ、最後にいうところの「資本主義」論とは何であるかが、改めて問われなければならないのである。クノル教授は自らの「資本主義」概念については積極的に定義されることなく問題を終えておられるのであるが、すでにふれたごとく、暗黙裡に「資本主義」は純粹に経済・技術的な世俗的秩序の概念であり、「資本主義」のもたらした社会問題を直接「精神」、とくに「キリスト教」の責任であるかのように宗教と経済の一義の因果連関を強調する立場は否定されているように思われる。もちろん、両者の関連が事実存在していることまで否認しておられるのでは絶対ないのであるが。したがって、たとえ教授は意図されないのであるにせよ、そこから教授の類型論でいう第一の「資本主義」概念——それはトマス主義やカトリック系自然法学者のよく採用するところであるという——への接近距離は、意外に近いといえるのではなからうか。もし、そうだとすれば、教授のいう「資本主義」論が今日改めて

このようなかたちで提起されなければならなかった所以もまた、おのずから理解できるところであるといえよう。

しかしながら、フランス革命とそれの投じた波紋がよびおこしたヨーロッパ社会思想の諸潮流に関連づけて、「資本主義」論を展開していること、そしてそういった方法的立場から、保守主義の諸潮流の思想的意義と位置づけを試みていること、またヴェーバーの「資本主義精神」論をカトリシズムの滲透している国々の資本主義について、いわば裏がえしたかたちで展開しようと試みた点などは、なかなづく彼の独自の思想的立場を示したものとして、「資本主義」論研究史上における一つの重要な寄与であるといえることができる。

——クノル教授の講義を想いだしつつ——

(一九六〇・九・一二)

Mittelstand konnte sich gar nicht auf der Basis des Katholizismus entwickeln. In der Stadt Augsburg, z.B., wurde an solcher Mittelstand immer mehr unterdrückt. Prof. A.M. Knoll betont, dass die Stadt Augsburg soziologisch auch dieselbe Rolle wie die Stadt Genf zur Entwicklung des Kapitalismus spielte. Aber die Stadt Augsburg mit den Jesuiten spielte wirtschaftssoziologisch gerade entgegengesetzt zur Stadt Genf zur Entwicklung des spezifisch modernen Kapitalismus. Ein solcher Kapitalismus entwickelte sich nur auf der Basis des industriellen Mittelstandes in Westeuropa und U.S.A. Nicht dieser Kapitalismus, sondern nur der sogenannte irrationelle Kapitalismus, nach der Terminologie von M. Weber, konnte sich auf der Basis des Katholizismus in den Städten Augsburg, Regensburg u.s.w. entwickeln. Daher scheint es mir verständlich, dass der anti-kapitalische Romantismus auf diesem Grund entstanden sein dürfte. Trotz einer solchen Problematik ist seine Arbeit für uns sehr wertvoll, weil seine Arbeit die soziologische Beziehung zwischen Religion und Wirtschaft ausserhalb des Gebietes des Protestantismus behandelt, worüber M. Weber bei Lebzeiten noch nicht genau schreiben konnte. Im Zusammenhang mit diesem Hinweisen möchte ich zuletzt noch eines Problem aufzeigen Prof. A.M. Knoll behandelte das Kapitalismus-Problem nur im Bezug auf den Einfluss der französischen Revolution, aber in diesem Fall dürfte man dieses Problem auch im Zusammenhang mit der Puritan Revolution behandeln, weil das Kapitalismus-Problem besonders erst ein spezifisch modernes Problem ist und ein solches Problem sich auch auf der Basis des spezifischen modernen Kapitalismus in England und U.S.A. entwickelte.

“Über das Kapitalismus-Problem von Prof. A. M. Knoll”

—Kazuhiko Sumiya—

In dieser kleinen Arbeit möchte ich meine Meinung über die Ansicht von Prof. A. M. Knoll, Professor der Soziologie an der Universität Wien, schreiben, weil er das “Geist des Kapitalismus” Problem von Max Weber in seiner Arbeit beschrieb und ich Interesse daran habe.

Prof. A. M. Knoll behandelt das Kapitalismus-Problem im Zusammenhang mit der Aufbereitung der französischen Revolution in Europa, besonders die Probleme der bürgerlichen Gesellschaft von F. Hegel, Saint-Simon, August Komte und Herbert Spencer. Die Auflösung des Hegelschen Systems verursachte, seiner Meinung nach, einerseits die Entstehung des konservativen Sozialgedanken wie Romantik, Neoromantik, Solidarismus (Heinrich Pesch) und Faschismus, und andererseits die Entwicklung des Sozialismus und Kommunismus. Zuletzt fragt er unter anderen, ob man eine einseitige Kausalbeziehung zwischen Religion und Wirtschaft (z.B. das sogenannte Unterbau-Oberbau Verhältnis) überhaupt feststellen kann. Seine Antwort ist negativ ebenso wie bei Max Weber. Er scheint mir eher behauptet zu haben, dass die Religion eigentlich keine Beziehung und hauptsächliche Verantwortlichung für die wirtschaftliche Beziehungen hat. Seine solche Meinung scheint mir der Typologisierung des “Kapital-” und “Kapitalismus-” Begriffes zu entsprechen. Seiner Meinung nach gibt es drei “Kapitalismus” Begriffe, 1) den technologischen Begriff des Produktiv-Kapitalismus, 2) den des Kapitalismus des unersättlichen Erwerbstriebes wie der “homo oeconomicus” von Adam Smith, 3) den Kapitalismus als das soziale Verhältnis, bei dem eine kapitalistische Klasse den Mehrwert des Proletariat od. der Arbeiterklasse ausbeutet.

Der erste Begriff ist eigentlich ein rein technischer Begriff. Daher kann dieser Begriff mit allen anderen soziologischen Kategorien verbunden werden. Er ist neutral für die sogenannten ideologischen Probleme. Dieser Begriff erscheint mir sehr adequat für den Standpunkt Prof. Knolls. Prof. A. M. Knoll berief sich dabei auf die Max Weber's Theorie über das Geist des Kapitalismus, um seinen Standpunkt in seinem Werke zu verstärken. Es ist sehr interessant und wichtig, dass er diese M. Weber's Theorie für eine Entwicklung auf der Basis des Katholizismus anzuwenden versucht. Aber gerade in diesem Fall scheint ein Problem zu entstehen, weil er über den Begriff des “Kapitalismus” von M. Weber zu einem gewissen Grade falsch aufgefasst zu haben scheint.

Er erkennt daran, dass die These von M. Weber nur auf der Basis des Protestantismus, vor allem des asketischen Protestantismus gilt. Zunächst weist er darauf hin, dass die Jesuiten genau dieselbe Rolle wie der Calvinismus damals auf der Basis des Katholizismus spielte. Der Dominicus spielte auch die selbe Rolle wie das Luthertum. Daher behauptet er, dass die Jesuiten auch eine ungefähr gleiche Bedeutung zur Förderung der Entwicklung des Kapitalismus hatte. Aber ich möchte auf ein Problem in seiner These hinweisen. Die Jesuiten erscheinen zwar ganz die selbe Rolle wie der Calvinismus zur Entwicklung des Kapitalismus gespielt zu haben, wie wir aus seiner These erkennen können, aber seine Ansicht scheint mir doch nicht gältig sein zu können, weil er dabei das Problem, wen der Träger des spezifisch modernen Kapitalismus war, und dass der Calvinismus besonders gut in dieser Schichte durchdrang. Die Stadt Genf entwickelte sich auf der von diesem industriellen Mitterstand geleiteten Basis. Aber solcher